

植物の世界に驚く。あれほど深い緑蔭を夏の日形づくっていたクスギ、コナラ、エゴノキ、ヤマザクラなどの高木、亜高木のすべては落葉して裸の枝の間から林床まで冬の陽光が斜めに入りこみ、木々の幹の長い蔭をまばらに写している。低木も落葉し、草本植物もほとんど地上部は枯れている。しかし、林床のあちこちに冬も常緑のシラカン、ヒサカキ、モチノキなど育っている。また落葉の間に見えかくれしながらジャノヒゲ、ジュンラン、ヤブランやベニシダ、イタチシダなど何れも冬も緑の多年生草本植物も見出せる。

植物の世界でも、生きものはきびしい環境下で本性を發揮する。北半球では気候的には冬がもっとも植物にとってもきびしい。北海道、東北地方の大部分、関東以西で海拔700m以下は気候的には冬も緑の常緑植物からなり立っている照葉樹林帯である。

一体「武蔵野の雑木林」と古くから親しまれてきたクスギーコナラ落葉（夏緑）広葉樹林は、どのようにして成立し、今日なお存続しているのだろうか。冬季の植生調査や雑木林の中の散歩でもすぐ気付くように、現在ところどころで林内に芽生えている常緑広葉樹や常緑植物が実は武蔵野の立地本来の緑——自然林の姿——を暗示している。

すなわち、我々の植生調査結果では関東地方はもとより、日本各地、東南アジアをはじめ北半球各地のほとんどすべての地域は、長い間の人間活動の結果、現存植生はその土地本来の自然植生から大きく変ぼうさせられている。関東地方の海岸沿いの沖積低地は、浜離宮、芝離宮に発達しているようなタブノキの森で被われていた。比較的乾燥し易い斜面上部などは、スダジイ林で占められていた。芝白金の自然教育園の土塁口のシイ林は河離宮のタブノキ林と同様に今から200数10年前に

植えられた常緑樹林である。どちらも有名な江戸の火事にも、関東大震災、第二次大戦中の焼夷弾ショウライダンの雨の中에서도見事に生きのびて、今日なお60数年前につくられた明治神宮のクスノキ、シラカン、ケヤキ林などと共に東京市街の中の緑のオアシスの役割を果たしている。

お茶の水大学に接している護国神社の森は、府中街道、甲州街道沿いの古い農家の屋敷林などのように常緑のシラカンが主になっている。最近の花粉分析結果からは約6000年前から関東地方でシラカン林が優先してきたことが明かにされている（宮脇編著1986：日本植生誌第7巻関東P.97）。しかし後氷期後期から先史農耕活動が盛んになり、照葉樹林が約2000年前から次第に減少し、全国的にはアカマツが増加しはじめたという（同上、塚田P.100）。

関東地方で照葉樹林が落葉広葉樹林に大きく移行したのは、木炭や薪を採るために15～20年に1回定期的な伐採が数100年以上の長い間くり返されたことによる。また当時化学肥料はなく、水田、畑の有機肥料、厩の糞草として毎年下草刈り、落葉掻きが行われてきた。したがって、照葉樹林帯の北限近くに位置する武蔵野などでは次第にシラカンの再生力が低下してきた。反面、自然状態ではより海拔高度の高い山地に自生していたコナラ、エゴノキなどが二次的に関東地方の台地、丘陵に下降してシラカン林におき代っている。萌芽力の強いクスギーコナラ林が、あたかも自然林のような状態で、実は長い間一定の人間活動と共存して特有の武蔵野の植物的景観を形成してきた。

しかし、今や雑木林も武蔵野から宅地造成などで急速に消滅を強要されている。

（横浜国立大学）

熱烈歓迎お茶大生

和田 明子

61年度前期の地理学特講がそろそろ終るころ、本務校のゼミ4年生の卒業論文中間発表会にお茶大の受講生の参加をよびかけたところ、彼女たちの気持のよい賛同をうけた。

夏休み明けの最初の土曜の午後（お茶大はまだ休み期間中）八王子セミナーハウスに、お茶大生と都留文科大地理ゼミ4年と3年生計30名が会合した。

都留大地理ゼミ9月の卒論中間発表は、卒論提出日まであと3ヶ月あまりの期間に、いかなる補足調査をし、本論を完成させるのか、そのきめ手をつかむきわめで重要なミーティングである。このようなゼミを他校とのインターゼミで開催したのは、私にとっても久しぶりのことであった。かつて長年つとめた東京都立大地理学科の学生と都留文科大地理ゼミとの地域調査の

報告ゼミを、同じ八王子のセミナーハウスでもったのは、10年前のことである。

宗教都市天理市の都市研究、筑豊宮田町の石炭産業の崩壊にともなう地域変貌、西脇の織物業、静岡榛原町の茶、徳島の葉タバコ、勝沼のワイン生産など、テーマは、多方面にわたるのが都留大地理ゼミの特徴の一つである。毎週のゼミでは、学生間で活発な討論をかさねるよう心がけているとはいえ、一教師の指導できる力量にはかぎりがある。多くのスタッフに学んだ学生との交流と討議は、都留大の学生にとって欠くことができないものである。にもかかわらず、その機会がなかなかつかめない。こんな事情をかかえていた私は、お茶大生の合同ゼミへの賛同をえたのである。

地理は、文献だけでは卒論が書けない。フィールドをあるきまわって、泥くさくなって、はじめて卒論ができる。この話が下宿で学生の口から口へ伝わっているためか、男女共学の都留大では、地理ゼミへの女性の参加がすくない。ゼミの4年生男性5人・女性3人、3年生男性8人・女性2人という構成の関係では、ゼミの女子学生がはたす役割は、なかなか重要である。ゼミ生にはいつも「女性だけでかたまりになって行動しないこと」ときびしくいつけている。なぜなら、女性が入らないパートは、いつの間にか活気を失っていくからである。

「先生、お茶大生とのゼミの話どうなりました？」

「先生、お茶大生とゼミをやるのはいいですね!」「先生、お茶大生ほんとに卒論中間発表会にくるんですか」お茶大生にセミナーハウスでの計画をもちだす前に、私が都留大の3年ゼミ生にこの予定を話したとき、彼等はハッと驚き、心もちうれしそうな顔をしたものの、けっして声にだして賛意を表明しなかった。しかし、1時間もたないうち、1人ずつつづつ私の研究室にきて、なにくれとないそぶりて、何事かつぶやき、そとでていったのである。

初秋の2日間にわたる討論は、他校からの学生の質問や意見によって、学生各自の思考の幅を大いにひろげ、卒論の完成へむけて意欲をかき立てられたとみることができる。インターゼミは成功した。お茶大地理学科の3年生と2年生! どうもセミナーハウスまできてくださって、ありがとう。

さて、1月の卒論発表会にもお茶大生の参加をと、4年ゼミ生もその心づもりで発表を用意していたところ、準備の手ちがいで、彼女たちと都留大生との再会の夢はきえかかった。しかし、まだお茶大生をスケートに招待したいという、ゼミ生の希望はこのこされている。彼等は「お茶大生熱烈歓迎」で、富士急都留市駅までむかえるのだという。これが実現されるのかどうか、たのしみにもまもりたいところである。

(都留文科大学)

雲南にみる農の文化

江波戸 昭

暮に5年ぶりに、お茶大生を含む地理関係の学生たちを連れて中国の雲南を訪れた。冬としてははじめてだったが、さすが“四季如春”といわれる地だけあって、標高2,000メートル近くあるにもかかわらず、省花のツツジまでがちらほらと咲く暖かさに驚かされた。そして、一面に緑が絨毯を敷きつめたような広々とした耕地。垣子と呼ばれる山間の盆地に開かれた水田や山の斜面の棚田・段畑が美事に裏作の作物に覆われているのである。裏作がほとんど姿を消してしまってもう久しく、うるおいのない日本——とくに関東平野の冬の田園風景になれきってしまったわれわれにとって、この行き届いた耕地の管理に、なにか忘れ去ったものを改めて教えられる想いがしたものだ。

うすい緑は小麦でちょうど麦踏み時の背丈、より色が濃く、量的に圧倒的に多いのが開花期に近いソラマメで、しばしば各種の葉菜類が混在している。1~2度は食卓にも登場した小粒のソラマメは、食用というよりむしろ飼料用であり、それに加えていうまでもなく、クローバーやレンゲ、ウマゴヤシなどと同様、マメ科の作物として地力維持の効果をもつものである。

有名な桂林のある広西省西部から貴州・雲南へとつづくカルスト地帯として、このあたり赤土の荒れ山もかなり目立つが、それが通訳氏の説明どおりの文革期の濫伐によるものだけなのかどうかは別として、里山に多く見られる松林の一角は、これまた非常によく管理されているように見受けられた。本来はこのあたり、